

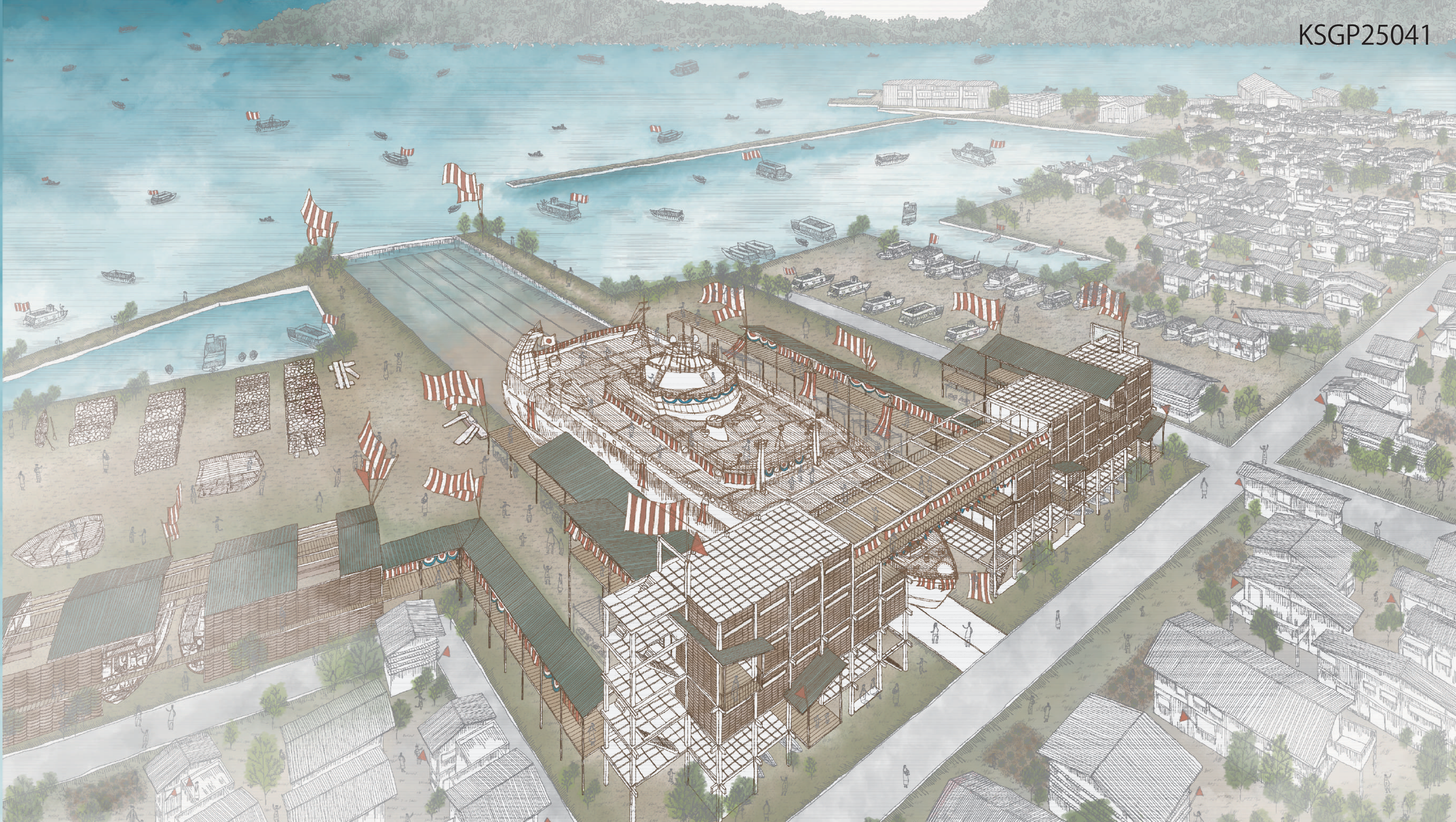
船渠をほどこ、 海をむすぶ

新山本造船所跡の解案による
まち固有風景の遺し方

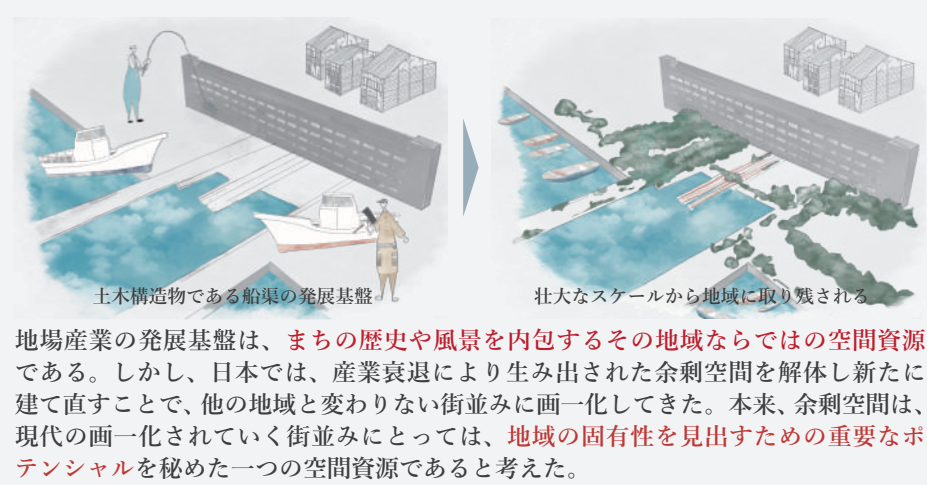
みんなの原っぱを考えたとき、
種崎には海があった。

かつて人々は、土地と密着して生業や文化を発展することで、まち固有の風景を築いてきた。しかし、街並みの画一化による人々と土地の乖離からその土地に暮らしている意味は失われつつある。その土地に根ざす風景や基盤を再解釈し、変化を受け入れながら復原していくことが解案時代にとって重要なテーマだと考える。

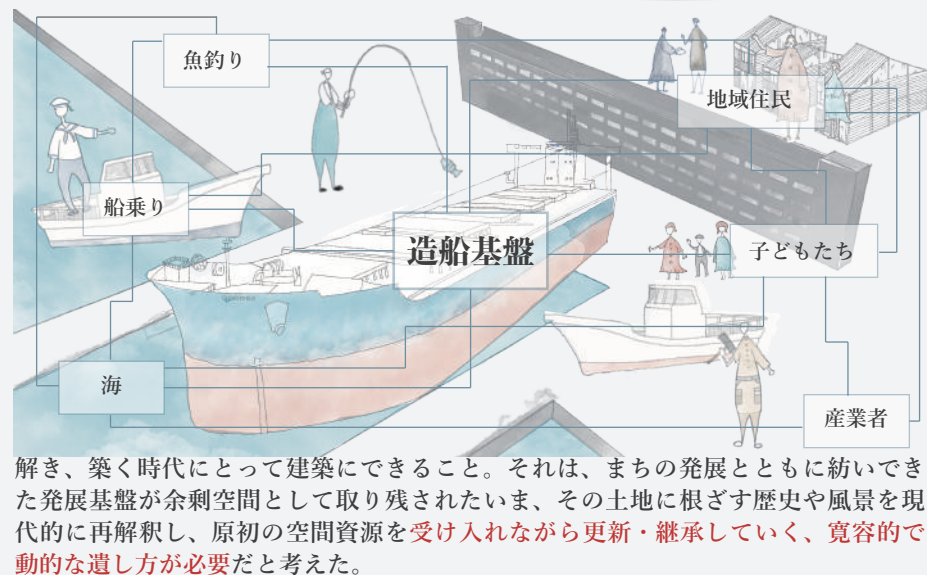
本提案では、種崎造船の船渠風景をほどこ、かつて人々が海と築いた景観と営みを再解釈し、まち固有の風景の遺し方を再編する。



01-a：社会背景／まち固有風景の行方



01-b：解き築く時代にとって建築にできること

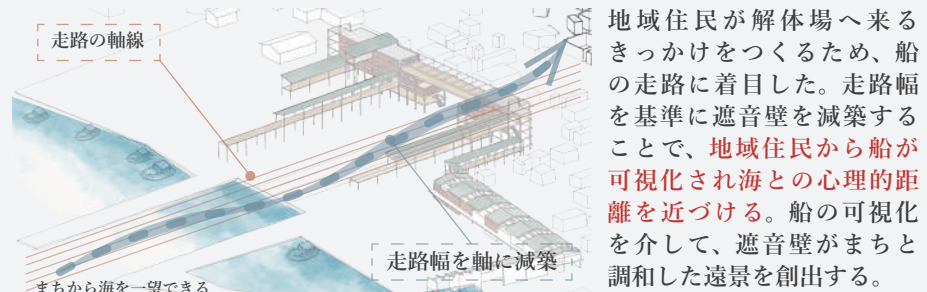


04-a：解案操作／まちと遮音壁

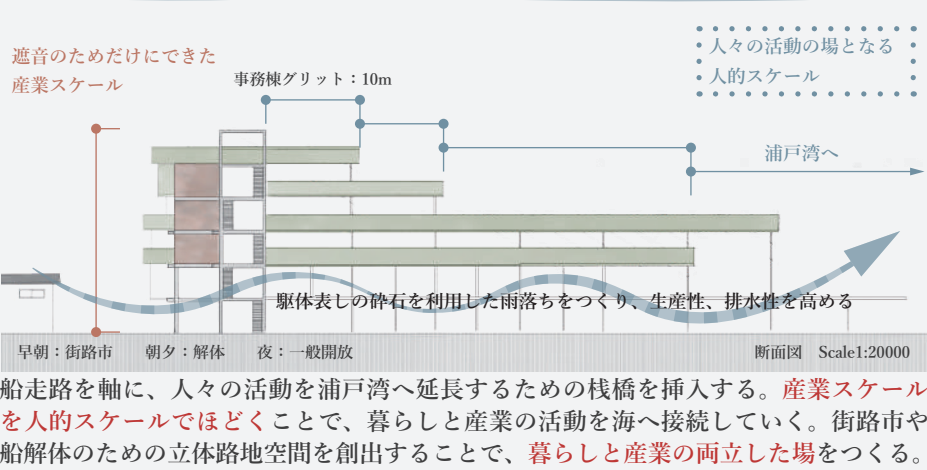


13mの遮音壁は、浦戸湾を隠し住宅街に圧迫感を生み出している。そこで、津波想定範囲の二階までを解体とし、遮音壁の増築背景を残すことで住民と地盤を繋ぐ。

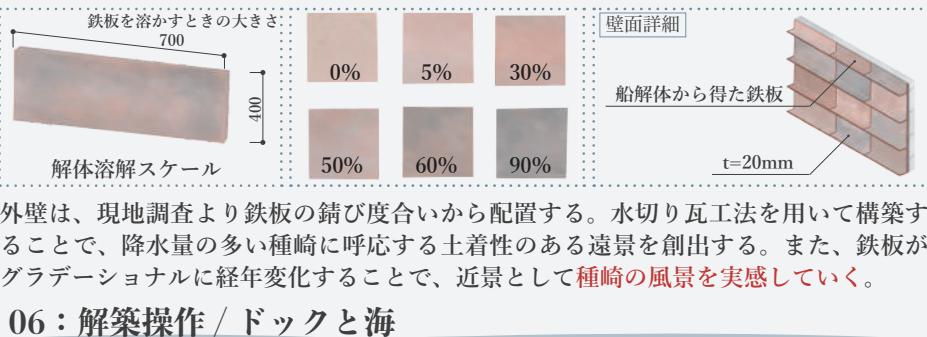
04-b：解案操作／まちと海をつなぐ船の接続口



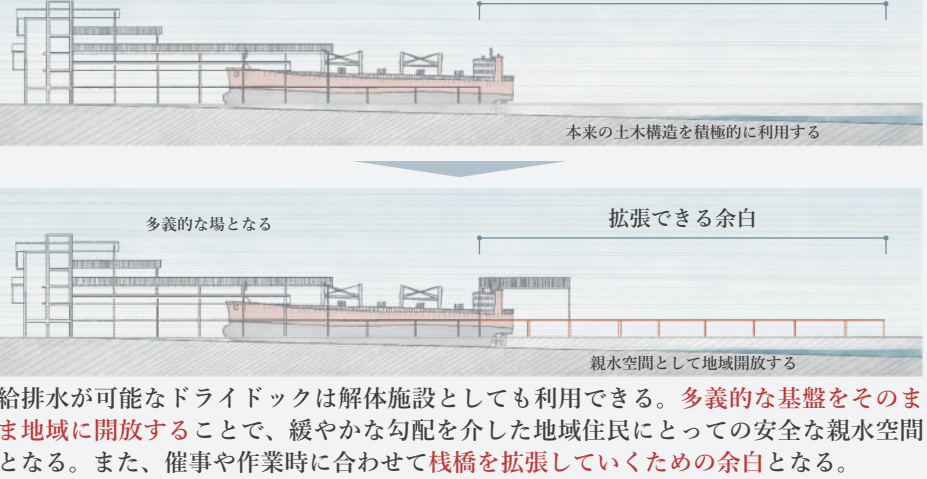
05-a：解案操作／遮音壁とドック



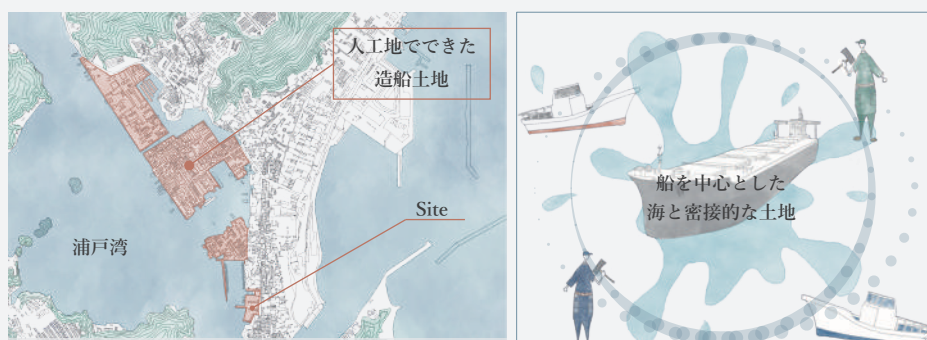
05-b：解案操作／鉄板のテクスチャと構成



06：解案操作／ドックと海

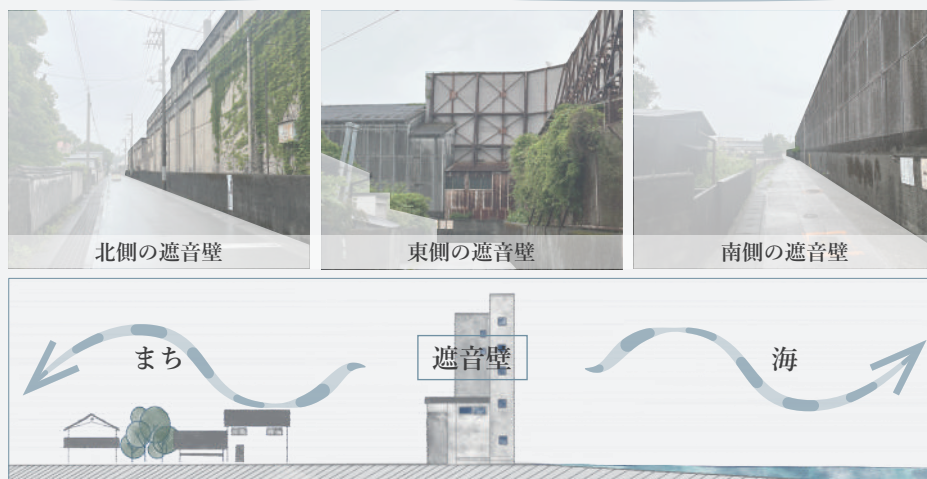


02-a：計画敷地／高知県高知市種崎 新山本造船所跡地



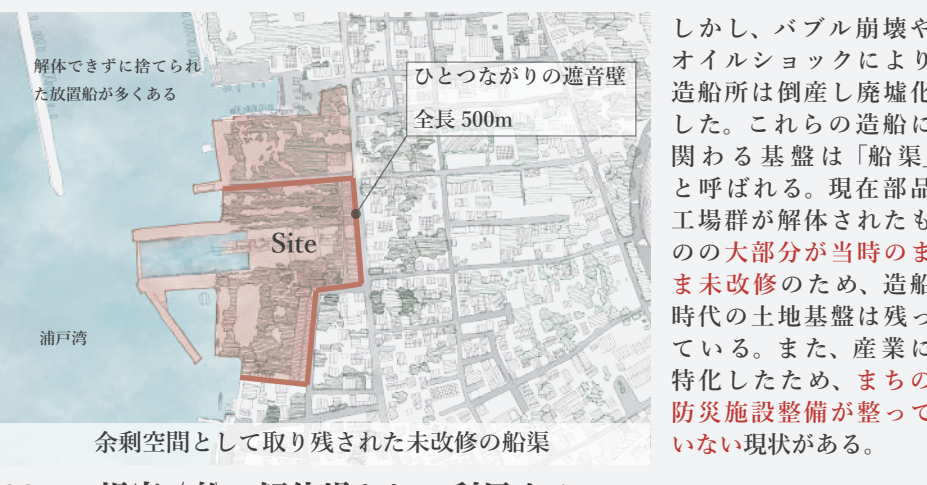
敷地は高知県高知市種崎の新山本造船所跡地。高知市は、海の玄関口であったことと全国一位の降水量など、豊かな自然環境や海と密接的な関係を持った土地である。中でも種崎は、浦戸湾沿い全面を人工地として埋立てて、造船のまちとして築いた地盤がある。敷地の新山本造船所は、種崎の発展に直結した日本最大の造船所であった。

02-b：計画敷地／街と海を分断する13mの遮音壁



その反面、造船時の騒音対策として13mの遮音壁を造船所とまちの境に建設したことで、まちと海が分断され住宅地から浦戸湾は見えなくなった。

02-c：計画敷地／造船土地構造の「船渠」に着目

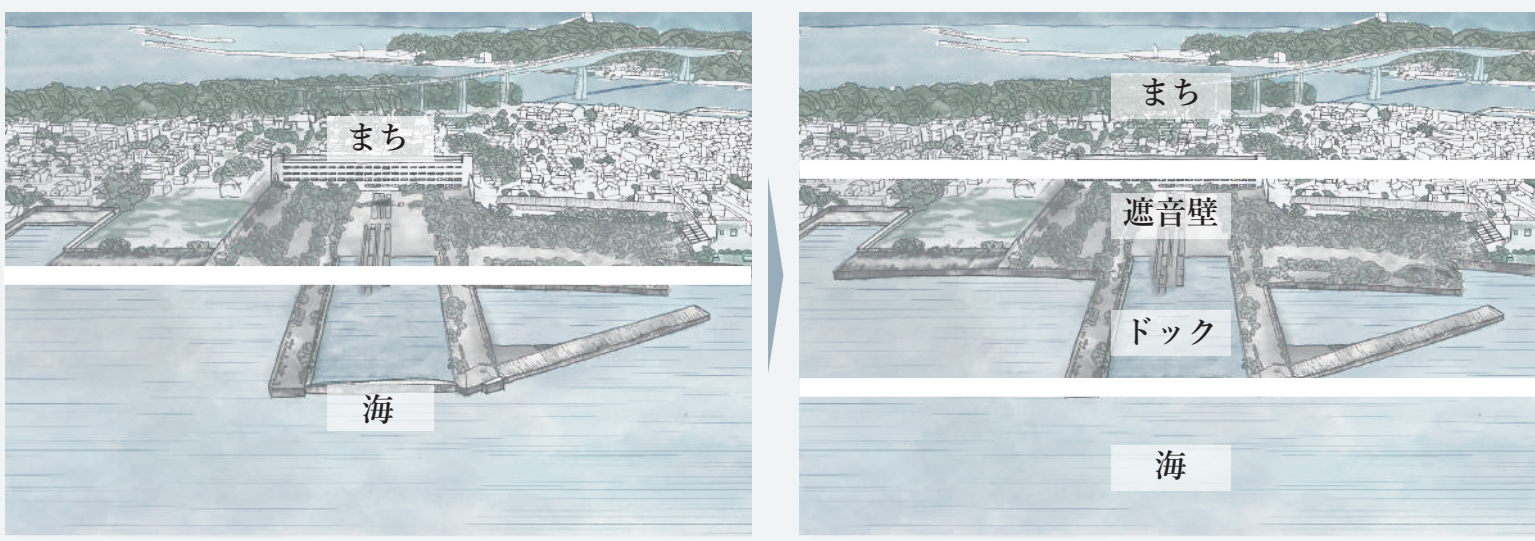


03-a：提案／船の解体場として利用する



そこで、かつての造船風景を再興するため船渠に着目した。今まで船を進水させてきた基盤から寿命を迎えた船が帰ってくるための解体場として再編する。まち固有の船渠を解案資源として利用しながら、災害時には防災拠点になることで、かつての船渠を現代でも実際に利用しながら継承することができると考えた。

03-b：提案／船渠風景を段階的にほどこことで海を穏やかにつなぐ



03-c：提案／地域に根づく工法と文化で長期的に遺していく



船渠再編から生まれる循環サイクル

